

原子力発電所等に関する特別委員会会議日程

平成 26 年 6 月 10 日 午前 10 時

富岡町郡山事務所 桑野分室

開 議 午前 9 時 58 分

出席委員（12 名）

委員長	渡 辺 英 博 君	副委員長	安 藤 正 純 君
1 番	堀 本 典 明 君	2 番	早 川 恒 久 君
3 番	遠 藤 一 善 君	4 番	宇佐神 幸 一 君
5 番	渡 辺 光 夫 君	6 番	山 本 育 男 君
7 番	高 野 泰 君	8 番	黒 沢 英 男 君
9 番	高 橋 実 君	10 番	渡 辺 三 男 君

欠席委員（1 名）

11 番 三 瓶 一 郎 君

説明のための出席者

町 長	宮 本 皓 一 君
副 町 長	齊 藤 紀 明 君
教 育 長	石 井 賢 一 君
会 計 管 理 者	遠 藤 博 美 君
参事兼総務課長	滝 沢 一 美 君
参 事	緑 川 富 男 君
企 画 課 長	菅 野 利 行 君
税 務 課 長	斉 藤 真 一 君
健康福祉課長	猪 狩 隆 君
住 民 課 長	伏 見 克 彦 君
参 事 兼 生活環境課長	横 須 賀 幸 一 君
産業振興課長 (兼任) 農業 委員会事務局長	阿 久 津 守 雄 君
参 事 兼 復興推進課長	高 野 善 男 君

参事兼復旧課長	郡	山	泰	明	君
教育総務課長	石	井	和	弘	君
参事兼 大玉出張所長	三	瓶	保	重	君
生活支援課長	林		志	信	君
総務課課長補佐	志	賀	智	秀	君
生活環境課 副主幹兼原子力 事故対策係長	坂	本	隆	広	君
産業振興課 課長補佐兼 賠償対策係長	猪	狩		力	君
いわき支所次長 兼業務係長	黒	沢	真	也	君

#### 職務のための出席者

議長	塚	野	芳	美
事務局長	佐	藤	臣	克
事務局庶務係長	大	和	田	豊

#### 説明のため出席したもの

福島復興本社 福島本部執行役員 復興推進室室長	林		孝	之	君
福島復興本社 福島本部復興 推進室副室長	武	井	澄	男	君
福島復興本社 福島本部復興 推進室副室長	林		幹	夫	君
福島復興本社 福島本所部長 郡山事務所長	野	口	栄	一	君
福島復興本社 福島本所部長 郡山補償一部 センター部長	西	村	幸	治	君
福島第二原子力 発電所副所長	佐	藤	隆	之	君

#### 付議事件

1. 原子力発電所通報連絡処理（平成26年2月・3月・4月分）について

2. 東京電力（株）福島第一原子力発電所 1 ～ 4 号機の廃止措置等に向けた中長期ロードマップの  
進捗状況について
3. その他

開 会 （午前 9時58分）

○開会の宣告

○委員長（渡辺英博君） 皆さん、おはようございます。

開会に先立ちまして、11番、三瓶一郎君より欠席届が出ておりますので、ご報告いたします。

ただいまの出席委員は12名、欠席委員は1名であります。執行部からの出席者は、町長、副町長、教育長、生活環境課長ほか各課の長であります。また、本日は説明のため、東京電力より林孝之室長ほか担当者の皆さんにおいでいただいております。職務のための出席者は、議長、議会事務局長、同庶務係長であります。

お諮りいたします。この委員会は、公開にしたいと存じますが、ご異議ございませんか。

〔「異議なし」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） 異議なしと認め、そのように決めます。

それでは、ここで本委員会に町長が出席しておりますので、町長よりご挨拶をいただきます。

町長。

○町長（宮本皓一君） 皆さん、おはようございます。本日の原子力発電所等に関する特別委員会の開催に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

東京電力は、本年4月より福島第一原発の廃炉、汚染水対策を強化するため、新たに社内分社化により東京電力福島第一廃炉推進カンパニーを設置いたしました。新たな体制のもと、今後の廃炉作業が迅速に実施されることを期待するものであります。

さて、福島第一では、引き続き厳しい作業条件の中廃炉作業が実施されております。昨年11月より実施されている4号機の燃料移動については、現在のところ大きなトラブルもなく順調に進められております。ふえ続ける汚染水対策では、地下水バイパスの海洋への放流が5月21日より始まっております。今後国、東京電力は、放流に当たり苦渋の決断をした漁業関係者を裏切ることのないよう、基準を遵守した運用が求められております。また、原子炉建屋周辺の土壌を凍らせて地下水の流入を防止する凍土遮水壁工事も、今月2日より着工いたしました。当町といたしましても、ロードマップに基づくこれらの取り組みについて、今後も引き続き関係機関と連携し、厳しく監視していきたいと考えております。

さて、本日の委員会では、2月から4月分の通報連絡処理についての説明、また東京電力からは廃炉作業に係る中長期ロードマップの進捗状況等について説明がありますので、委員の皆様には慎重なご審議を賜りますようお願い申し上げます。それでは、よろしくお願い申し上げます。

○委員長（渡辺英博君） ありがとうございます。

それでは、早速付議事件に入ります。

付議事件1、原子力発電所通報連絡処理（平成26年2月・3月・4月分）についてを議題といたします。

生活環境課長より説明を求めます。

生活環境課長。

○参事兼生活環境課長（横須賀幸一君） おはようございます。原子力発電所通報連絡処理については、担当係長より説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。

○委員長（渡辺英博君） 坂本係長。

○生活環境課副主幹兼原子力事故対策係長（坂本隆広君） それでは、私のほうから説明をさせていただきます。

まず、資料のほうですが、A 4 縦のこの 4 ページものが 1 つあります。あと、こちら 15 ページほどありますが、通報連絡の内容を記載した A 4 横の資料があります。それでは、4 枚ものの資料のほうで説明をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。申しわけありません。座って説明をさせていただきます。

それではまず、福島第一原子力発電所の通報実績についてご説明をさせていただきます。まず、2 ページをお開きください。2 ページ下のほうに通報件数のほうが記載されております。26 年 2 月から 26 年 4 月に通報された件数につきましては、1,372 件となっております。そのうち 967 件が原子力災害特別措置法による第 25 条の通報となっております。

それでは、お戻りいただきまして、1 ページをお開きください。初めに、ナンバー 8 番ですが、2 月 19 日に発生しました H 6 エリア上部からの水の垂れ落ちについてについてご説明をいたします。こちらの事象につきましては、汚染水タンクのほうの移送を実施しておりましたが、本来移送すべき汚染水を移送すべきところでないところに弁の操作を誤り、こちらの H 6 のタンクのほうに水を入れてしまったというものです。水が入ったことによりまして、上部からの水が漏えいしたということであり、こちらにつきましては、上部の雨どいを通じまして周辺を囲っております堰の外へ約 100 トンほど汚染水が漏えいしております。こちらの案件につきましては、さきに行われました 3 月の特別委員会のほうでも東京電力から説明がありましたが、そちらの調査の結果といたしまして、本来閉まっているべき弁が発見をした当時あいていたということで、タンクのほうに水が入ったということです。最終的には、その弁がまたもとに戻っていたということで、考えられる原因といたしまして、人為的なものが考えられるということで報告を受けております。こちらにつきましては、現在原因の調査、再発防止対策について実施をしておりますが、弁の箇所について鍵をかけるということで施錠管理、またタンク水のタンクの水位計の設置をしまして、警報発生時の対応マニュアルを改正し、社員、現場作業員への周知を徹底していくということで報告を受けております。

続きまして、ナンバー 9 の 2 月 25 日に発生しました 4 号機使用済み燃料プール冷却停止についてご説明をいたします。この事象につきましては、建屋の止水対策の工事を実施するため、地盤改良に伴うボーリング掘削工事を実施中に、地盤より約 1 メートルの深さに埋められていたケーブルを切断したということであり、ケーブルの切断によりまして、4 号機の使用済み燃料プールの冷却が一時

的に停止をしております。構内には、原発事故以降緊急的に布設された多くの配管、ケーブル等が現在も残っておりますが、今後東京電力としましては計画的にトレンチやU字溝などに布設をしまして本設化を進めていくということで報告を受けております。

続きまして、2ページをお開きください。次に、ナンバー23番、区分Aということで、こちらに作業員の被災についてという事象がありますが、こちらにつきましては、後ほど東京電力より説明をいたしますので、よろしくお願いいたします。

次に、ナンバー26番の説明をさせていただきます。こちらの事象につきましては、原子炉建屋内の滞留水を常時移送をしておりますが、本来移送すべき場所ではないところにポンプを稼働して移送してしまったというものであります。こちらにつきましても、汚染水が別のところに移送されているところを発見した時点で、本来稼働されない仮設ポンプが4台ほど動いていたということで、こちらでも誤って電源盤のスイッチを入れてしまったということで調査報告がなされております。そちらも、また同じような対策にはなりますが、電源盤の施錠管理、あとは当面使用しないポンプについては電源を切り離す等の対策をとるということで報告を受けております。

次に、ナンバー27番の事象になります。こちらは、4月16日に多核種除去設備、ALPSであります。こちらのHICという吸着材を最終的に保管する容器になります。こちらの容器のほうに吸着材等を入れている作業中に、こちらのHICという容器からオーバーフローしたという事象になります。こちらについても、作業中の人員配置が適正でなかったということで報告等が上がっておりますが、これまでも同じように、人的な基本的なミスが大変多くなっておりますので、今後も県の監視協議会等でいろいろと意見を述べさせてもらいたいと思っております。また、こちらのALPSのほうですが、これまで水処理がうまくいかないということで、AからC系統、3系統が全てとまった状態になっておりましたが、B系統につきましては先月23日より稼働をしております。A系統については、昨日稼働を始めまして、残りC系統についても今月中の再稼働を目指し現在準備をしております。こちらのほうの水処理がうまくいかなかったということで、原因なのですが、こちらフィルターに使われておりますパッキンのほうが放射線の影響によりまして劣化したということで、そちらによって水処理がうまくいかなかったということであります。パッキンにつきましては、材料のほうを改良いたしまして、別の資材でつくられたパッキンをつけて、現在のところA、Bの2系統については運転を再開しております。

続きまして、3ページ、福島第二原子力発電所の通報実績についてご説明をさせていただきます。こちらにつきましては、全てが異物の発見、回収、確認ということになりますが、まずナンバー1の2月6日の事象であります。こちらは4号機原子炉格納容器圧力抑制室で作業をしていたところ、異物を発見したということになります。こちらにつきましては、発見後異物の回収を行っておりまして、約1センチほどのナットが回収されております。ナットにつきましては、抑制室内の作業用床のグレーチングにつけられていたナットと同型のものということで、そちらのナットが落下したと推定

されております。防止対策としましては、室内のほうに約500カ所ほどナットがついておりますが、全てのナットについて緩み等についての再点検を実施いたしております。

次に、2番から10番になりますが、こちらは使用済み燃料プール内での異物の確認ということになります。一番最初に、ナンバー2の3月5日の事象ですが、1号機の使用済み燃料プールの点検中に異物を発見しております。こちらについては、約45センチのワイヤーつきのフック及び中性子検出器の排気用具ということで、こちらがプールのほうにあったということで発見されております。こちらの1号機の異物の発見によりまして、3月24日からありますが、以降2号機、3号機、4号機の点検を実施しております。点検の結果、2号機、4号機につきましては、ワイヤーつきボルトやワッシャー等の異物が10個ほど回収をされております。その後の調査結果によりまして、まず1号機のワイヤーフックにつきましては、平成4年以前に行った機器の交換作業時に落下した可能性があるということで報告を受けております。また、2号機、4号機の使用済み燃料プールの異物であります。こちらにつきましては、定期検査等で使用する部材と同様のものであるということで、定期検査時に持ち込まれて落下したと思われます。全ての異物につきましては、プール内に混入した経路や時期については特定はできておりませんが、平成16年の4月から異物混入防止対策というものを強化しておりまして、全ての持ち込みについて確認シートを用いて作業工具などの持ち込み等を監視しておりますので平成16年の4月以前の定期検査において持ち込まれたものが落下したものと考えられております。対策としましては、引き続き異物混入対策の徹底と作業終了後の水中カメラ等を利用した中の落下物がないことの確認をするということで報告を受けております。

以上が福島第一と第二の2月から4月分の通報連絡の説明となります。

また、4ページのほうに、期間中の発電所の状況確認の内容を載せております。また、先ほどご説明しましたが、A4横のものにつきましては、こちらに記載されております通報連絡の内容を記載したものを用意しておりますので、よろしくお願いします。

以上です。

○委員長（渡辺英博君） それでは、説明が終わりましたので、これより質疑に入ります。ございませんか。ないですか。

〔「なし」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） ないようですので、以上で付議事件1を終了いたします。

次に、中長期ロードマップの進捗状況について東京電力より説明を求めていますので、直ちに入室を許可いたします。

暫時休議いたします。

休 議 （午前10時14分）

---

再 開 （午前10時19分）

○委員長（渡辺英博君） それでは、再開いたします。

付議事件２、東京電力（株）福島第一原子力発電所１号機から４号機の廃止措置等に向けた中長期ロードマップの進捗状況についてを議題といたします。

説明出席者は、お手元に配付した名簿のとおりでございますので、ごらんいただきたいと思います。

まず最初に、東京電力を代表いたしまして林孝之執行役員よりご挨拶をいただき、その後各担当者より簡単に自己紹介をお願いいたします。

林執行役員。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） おはようございます。福島復興推進室の林でございます。本日はよろしくお願いいたします。

当社の福島第一原子力発電所の事故により、今なお富岡町の皆様、そして多くの県民の皆様にご迷惑とご心配、そして日々の生活の中で大変なご苦勞やご負担をおかけしておりますことを、この場をおかりしまして改めて心よりおわび申し上げたいと思います。申しわけございませんでした。

当社は、事故への責任を長期にわたって果たすために、汚染水対策や廃炉の措置に最大の経営資源を投入することはもちろんのこと、原子力賠償や後ほどご説明させていただきますけれども、復興推進の活動等の取り組みについても、今回の異動の中で７月になりますけれども、ベテラン管理職を順次福島のほうへ専任してもらいながら、これまで以上にこの地で力を尽くしてまいりたいと思っております。今後とも私どもが果たすべき役割、責任はしっかりと認識するとともに、一つ一つの取り組みを着実に推進することが今現在避難されている方々の早期ご帰還や新しい新たな生活につながっていくことを肝に銘じながら、我々は全社挙げて業務に邁進したいと思っております。本日は、限られた時間かも知れませんが、皆様とご意見をいただきながら、また議論しながら一歩でも前に進めたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。お願いいたします。

○委員長（渡辺英博君） では、自己紹介をお願いします。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（武井澄男君） 復興推進室の副室長をやっております武井と申します。よろしくお願いいたします。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） おはようございます。復興推進室の副室長で技術担当をやっております林幹夫でございます。よろしくお願いいたします。

○福島復興本社福島本部郡山事務所長（野口栄一君） 郡山事務所長の野口でございます。よろしくお願いいたします。

○福島復興本社福島本部郡山補償相談センター部長（西村幸治君） 郡山補償相談センターの西村と申します。よろしくお願いいたします。

○福島第二原子力発電所副所長（佐藤隆之君） 福島第二原子力発電所の副所長、佐藤でございます。

○委員長（渡辺英博君） 以上ですか。

それでは、自己紹介が終わりましたので、早速説明を求めますが、資料がこれ大分いっぱいござい



ますので、廃炉汚染水対策で1つと、あと固体廃棄物で1つと、あと復興本社に関することで1つと、1回ごとと区切ってそれで質疑応答したいと思いますので、よろしくお願いします。

お願いします。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） それではまず、福島第一の1号機から4号機の廃炉の工程につきまして……

○委員長（渡辺英博君） 座って結構です。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） ご説明よろしいでしょうか。では、着座で失礼いたします。

A3の資料がございまして、多数用意してございますけれども、説明に使用させていただきますのは、一番上に用意させていただいております2枚ものでご説明をさせていただきたいと思っております。それ以外の資料につきましては、参考資料としてご用意させていただきました。そういうことで、廃炉汚染水対策の概要というホチキスどめ2枚物のA3の資料を説明させていただきたいと思えます。それ以外の資料につきましては、添付資料1、添付資料2、それから参考資料とございますけれども、これは参考としてご用意させていただいたものでございます。それでは、廃炉汚染水対策の概要につきまして、これからご説明させていただきます。

A3の資料一番上でございますけれども、上下に説明がございまして。上の段は、廃炉の工程でございまして。廃炉の工程につきましては、3本の矢印で示させていただいております。一番上の矢印は、使用済み燃料プールからの燃料取り出し工程でございまして。中段の矢印につきましては、燃料デブリ、損傷した炉心についてでございますけれども、熔融燃料をデブリと呼ばせていただいておりますが、これの取り出し作業の工程でございまして。3本目の矢印でございまして、これ原子炉施設の解体といった最終段階の廃炉工程でございまして。現状1号機から4号機、あるいは1号機から3号機をこの矢印の中の緑色の逆三角形がございまして、こちらでお示しさせていただいております。では、一番上の使用済み燃料プールからの燃料取り出しにつきましては、まず4号機が燃料取り出しをやっている最中ということでございまして、3号機、それから1、2号機という順で追従してございまして。この使用済み燃料プールからの燃料取り出しにつきましては、まずこの矢印のところ4段階で工程が書かれておりますが、瓦れきの撤去、除染、それから燃料取り出し設備の設置、それから燃料取り出しとその後の保管、搬出という工程でございまして。4号機につきましては、燃料取り出しをやっている最中ということでございまして、上の段の右側にお写真がございまして、資料の中では6月2日時点、燃料取り出し体数として968体、全数が1,533でございまして、約63%取り出し完了というふうにお示ししてございますけれども、昨日現在では1,034体の取り出しが終了してございまして、進捗率としては67%ということで、口頭で訂正をさせていただきます。この作業につきましては、今年の11月18日より開始いたしまして、この26年中に終わらせる予定でございまして。左側の矢印に戻りますけれども、3号機、それから1、2号機につきましては、瓦れきの撤去、除染をやっている最中とい

うことでございまして、3号機が一番その中では進んでいるということでございます。そして、工程の2本目の矢印でございませうけれども、燃料デブリの取り出しという工程につきましては、1号機から3号機それぞれ最初の工程、除染、漏えい箇所調査という段階でございませう。資料下の段でございませうが、汚染水対策につきまして、その項目をお示しさせていただいております。左側に方針1、方針2、方針3というふうに3つの項目に分けておりますが、方針1としましては、汚染源を取り除く。方針2としましては、汚染源に水を近づけない。方針3としては、汚染水を漏らさない、それぞれの方針につきまして丸番号で1番から9番の対策を実施中でございませう。このそれぞれ現場の状況につきましては、下の段の真ん中に航空写真がございませうけれども、この中でお示しさせていただいておりますとおり、①から⑨番ということで汚染水対策を実施中でございませう。その中でも最も重要と考えております対策につきまして、右側に3つの囲いで特出しさせていただいておりますが、まず1番目に多核種除去設備ということで、通称ALPSと呼んでおりますが、汚染水の中63種類の放射性物質がございませうが、そのうちの62種類までは取り除けるという装置でございませう。1つだけトリチウムだけは除去できないものでございませうが、汚染水の中の放射性物質62種類を取り除きまして、トリチウムだけの汚染水にしてタンクに貯蔵するということをやっております。多核種除去設備につきましては、トラブルが続いております、運転を停止したりとしておりましたが、この現在におきましては3系統あるうちの2系統は運転再開をしております、残りの1系統はトラブルの対策を実施中でございませう。6月中には3系統また稼働の予定でございませう。その下の段、凍土式の陸側遮水壁ということでございませうが、6月から着工することができました。これまでは、構内におきまして試験的な確認運転をやっておりましたけれども、その結果を反映しつつ、実際の1号機から4号機を囲い込む総延長1,500メートルの凍土壁の構築作業に現在取りかかっているところでございませう。最後の下の方でございませうけれども、海側遮水壁ということでございまして、鋼管矢板の打ち込みにつきましては、残り9本を残して打ち込みは完了してございませう。そして、海側の護岸とこの鋼管矢板の間につきまして、現在埋め立てをやっている最中でございませう。ことしの9月からこの運用を開始するというので、鋼管矢板の打ち込み、それから埋め立てが完了する予定でございませう。

続きまして、資料裏面をごらんいただきたいと思います。その中でも、工程の中でも特に最近進捗しているところにつきまして、この資料の中でお示しさせていただいております。まず、原子炉建屋を縦断面図でございませうけれども、1号機、2号機、3号機、4号機と真ん中に図がございませう。1号機につきましては、建屋カバーを事故後の、事故の年の10月に設置しまして、放射性物質の飛散防止を図っておりましたが、現在ではこの放射性物質の飛散の状況は非常に低くおさまっております、この建屋カバーを外す工程に今月から入る予定でございませう。そして、1号機につきましては、現在その吹き出しの一番下の段の左側にございませうとおり、1号機圧力抑制室上部調査による漏えい箇所確認ということでございまして、この原子炉建屋の縦断面図の中にございませうだるまさんのような格納容器の部分の破損箇所の調査をしている最中でございませう。そして、原子炉に注水してい

るお水が格納容器内に漏れます。そして、格納容器から原子炉建屋に漏れるという状況でございますが、この格納容器からの漏えい箇所を確認することができました。5月27日から調査をいたしまして、漏えい箇所を確認に至りました。今後この漏えい箇所を修理するという事で工事を進めてまいります予定でございます。そして、真ん中の図の中の1号機、2号機、3号機、4号機並んでおりますけれども、2号機につきましては、建物の中の除染ということで現在進めておりまして、原子炉最上階の非常に高い線量の部分がございますが、そちらの調査ということで、屋上に穴をあけてカメラや放射線の測定器等挿入します。それから、事故のときに1号機の爆発で吹き飛びました原子炉建屋のブロートパネルというものの、その開口部現在ふさがっておりますけれども、そこをあけてそこからロボットを入れて床面の除染のための調査をやっておる最中でございます。続きまして、3号機でございますが、4号機に続いて使用済み燃料の取り出しを行うべく最上階の瓦れきの撤去が終了いたしました。現在は使用済み燃料プール内に落ちている瓦れきの撤去を進めておるところでございます。加えまして、3号機につきましては、この資料吹き出しがございます下の段の真ん中でございますけれども、格納容器からの漏えい箇所確認ということでございます。この図の中にありますように、だるまさんのような格納容器の中、1号機、2号機に比べまして3号機につきましては、青く塗りつぶした部分が結構深く水位が保たれているという状況でございますが、これを裏づける漏えい箇所ということで、主蒸気配管の部分でございます。その伸縮継ぎ手というふうに図の中にお示ししておるところ、そこから漏えいしているということが確認できました。この漏えい箇所の確認は、1号機に加えて3号機におきましてもここまでたどり着くことができて、今後はこの漏えい箇所を修理していくということの工程に移ってまいります。続きまして、図の中の4号機でございますけれども、先ほど紹介させていただいたとおり、使用済み燃料プールの燃料の取り出しを進めておりまして、968という赤い文字につきましては、1,034というところまで進捗しておりまして、63%というふうに記載しております部分につきましては、67%の進捗率ということでございます。これ、6月9日時点でございます。吹き出しのこの左側の真ん中でございますが、多核種除去設備の運転を順次再開ということで、先ほど私口頭で申し上げましたとおり、ALPSにつきましてはA系、B系、C系3系統でございます。ふぐあい箇所というのは、フィルターのガスケットにつきましてこれが放射線による劣化で漏えいを起こしたという事象でございまして、このガスケットを放射線に強いゴム製のものに取りかえをして運転を再開しておる最中でございます。A系、B系は運転再開、C系につきましては6月の中旬に再開する予定でございます。吹き出し一番下の右側でございますが、福島給食センター起工式というふうに記載がございますが、大熊町に設置する予定の給食センターにつきまして着工でございます。5月29日のことでございます。資料一番上に地下水バイパスということで、排水開始ということをお示しさせていただいておりますけれども、5月21日に1回目の排水をさせていただきました。これまで4回の排水を行っております。資料の中、文字上から4行目にその日付、それから放水した地下水の量というものをお示ししてございます。5月21日、5月27日、6月2日、6月8日とい

うことで、4回放水をさせていただいております。いずれも、当社の分析結果のみならず、第三者機関の分析結果をもとに放水の判断をしておるということでございます。右側に表がございますが、ちょっとわかりづらい表でございますけれども、一番右から3番目に運用目標という欄がございます。セシウム134、137、1ベクレルリットル当たり、それから全データ5ベクレルリットル当たり、それからトリチウムは1,500ベクレルリットル当たりを運用目標値といたしまして、これ以内であるということを確認できましたら放水させていただくということでございます。表の中には、5月21日と27日に放水させていただいた分析結果が示されてございます。

そして、最後のシートでございますけれども、3分の3ページでございます。航空写真の中に今ほどご説明させていただいた内容の工事の進捗状況として、特出しでご説明させていただいたものの地図の中に、どの位置でこれが行われているかということをお示ししたものでございます。1号機、それから3号機、それから4号機、それから地下水バイパス、それから多核種除去設備ということでございます。あと、大熊町の給食センターということでお示しさせていただいております。

以上、簡単でございますが、1号機から4号機の廃炉工程の進捗状況についてのご説明でございました。以下の資料につきましては、参考事項としてご用意させていただきました。

以上でございます。

○委員長（渡辺英博君） それでは、説明が終わりましたので、これより廃炉汚染水対策につきまして質疑に入ります。ご意見ございませんか。

3番、遠藤一善君。

○3番（遠藤一善君） 済みません、何点か確認させてほしいのですけれども、まず凍土壁の陸側遮水壁が始まったということで、随分規制庁というか、国のほうから凍土壁が危ないのでは、悪い影響を及ぼすのではないかという話がいろいろ出ていたのですが、沈む、沈まないのやつは新聞に出ていて、何センチかしか建物が沈まないだろうということであつたのですが、あとその中で心配の話として、我々のところからも出ていたのですけれども、水のその調整がうまくできるのかという話が相当出ていたのですけれども、そこの辺どういような形で国のほうに対して説明をして納得していただいたのか。それとも、まだ納得してもらって途中なのか、お聞かせください。

それから、揚水井の話が出ていて、12番の揚水井からくみ上げが停止になっているという報道がよく見受けられるのですけれども、航空写真で見ると何となく想像はつくような気もしないでもないのですが、なぜ12番の揚水井からだけいつもトリチウムが高く出るのか。どういうふう考えていて、それに対する改善策をどういうふうしているのか、ちょっとお聞かせください。

それから、3号機の格納容器から漏えい箇所を確認されたということなのですが、注水している量とここから漏えいしている量が今同じになっているからここで一定になっているのか。何か出て行く、3号機に限っては、圧力抑制室もちゃんと水が満杯になっているというふうな絵で描かれているのでもうちょっと水を入れればこの上のところまで、圧力容器のところまで水が行くような気がするので

すが、それがしないというか、できないのかしないのか。それがなぜなのか、1点お聞かせください。

それから、2号機で、けさの新聞に水位が30センチだったということで出ていたのですけれども、30センチというと相当低い状態で、それでもデブリがちゃんと水に入っているというようなことなのですが、この辺もうちょっと詳しくその30センチでも大丈夫な状況の想定をちょっと教えてください以上です。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） ご質問ありがとうございます。

まず、凍土壁についてでございますけれども、水位の調整ということでございます。凍土壁を構築しますと、1号機から4号機の間囲われると。氷の壁ができるということで、外側からの地下水の浸入がなくなります。そして、現状地下水の水位には勾配がございますが、これが正定するというふうに考えられます。そして、そのときの地下水の水位は、建物の中の汚染水の水位よりも高くなければいけません。汚染水のレベルよりも地下水のレベルが低くなってしまうと、これは汚染水が外に漏れる、そういうリスクが生じますので、そういうことがないようにということで水位調整が重要であるということでございます。まず、囲い込みが完了しますと、地下水の水位が正定すると先ほど申し上げましたとおりでございますが、その状態では建物内側の汚染水のレベルよりも地下水は高いというふうに考えますけれども、万一そういった水位調整、地下水のほう下がっていくというようなことが起こりますと、それはまずいわけですので、注水するための井戸を構築してございます。地下水レベルが下がり過ぎないように、注水が必要な場合には注水を行いますということで、そういった設備を用意してございます。自然に地下水が抜けていくということは、凍土壁ができ上がっている段階では起こらないはずでございますけれども、万一に備えてそういうことをやります。

それから、その後でございますが、建物の中の汚染水のレベルを下げていくという工程に移ります。それによりまして、汚染水のレベルを下げ、そしてそれに伴って地下水のレベルも少しずつ下げていくということをやってまいります。それを行っていくことによりまして、現在1日400立米建物の中に地下水が浸入しておりますけれども、その地下水の浸入をとめていくことができます。そんなことでやってまいりますけれども、その過程におきましても地下水のほう下がりが過ぎないということが重要でございます。下がり過ぎるようなことがないように、先ほど申し上げた注水もやるということ。それから、下げる方法としましては、もともと建物周りにございましたサブドレーンと言っている井戸がございます。このくみ上げをやることによって、地下水のレベルは下げていくことができます。

あと、建物の中の汚染水レベルが下げられるということも先ほど申し上げました。そのために必要なのは、先ほども原子炉建屋、それから原子炉格納容器からの漏えいをとめるということも重要でございます。それによりまして、汚染水レベルも下げていくことができるということでございます。いずれにしましても、その水位調整が非常に重要でございます。重要な作業でございますので、この水

位がどこにあるかということ監視することも十分であるとか、それから注水のための井戸それで十分かとか、そういったことをいろいろな懸念事項に対しまして、どちらも準備している状況をご説明しているという段階でございます。

簡単でございますが、次の12番の地下水パイプ、井戸のご質問でございますけれども、12番の井戸だけほかのよりも高いというのが現状でございますが、そのほかにも7番も若干高目のものがございます。それぞれ井戸を掘り上げた当時から12番も高目だったということでございます。現在1,700ベクレルリットル当たりというトリチウムの濃度が確認したため、くみ上げを停止してございますけれども、今傾向を監視するということで、週に2回サンプリングをしてその結果を確認している最中でございます。現在1,700ということでございますが、昨年2月にこの井戸が完成した時点でも400から500くらいのトリチウム濃度でございました。この図を見ても、一番左の黄色い丸がその12番の井戸でございますが、汚染水をためているタンクに近いということで、先ほどご質問の中でもその濃い理由が想像できるというふうにおっしゃってございましたけれども、この理由につきましては、昨年の夏まず300立米タンクの底から漏らしてしまいました。その影響、それからこの2月にはタンクの上から100立米あふれさせてしまいました。それぞれの影響につきましては、観測用の井戸を十数カ所掘りましてその影響は調査をしている最中でございます。その昨年の8月に300立米漏えいしたものが12番に到達しているかどうかという点では、まだ到達はしていないと思いますけれども、その影響はゼロとは言えないと思います。しかしながら、昨年2月に掘り上げた時点で高かったということもございまして、これは恐らく事故当時この高台に汚染水を引き回して湛水化、それから備蓄ということでやっておりましたが、耐圧ホースで当時引き回しておりました。その接続部分が外れてしまったり、ホースが劣化して穴があいてしまったりという事象が何件か続きました。その当時の影響、それと事故のときに爆発して飛び散ったトリチウムというものも影響している可能性がございまして、私どもとしてはこればかり何の理由で今1,700かということまで申し上げられるような状況ではございませんが、過去の漏えい事象等の影響が考えられるということでございます。

それから、3号機の注水量でございますけれども、1枚目の裏面の図のほうで、3号機だけが格納容器の中のレベルも高いというふうに先ほどもご説明させていただきましたが、ちょうどこの漏えい箇所を確認させていただきましたという主蒸気配管の漏えい部分に相当する位置、高さ位置がこと一致いたします。漏えい量につきましては、注水量と一致しているかということは、まさに現在それを評価している最中でございます。一致していない場合は、ほかにも漏えい箇所があるということになると思います。やみくもにここで注水量をふやすということはする予定はございません。当然ふやせば、格納容器内のレベルは少し上がるかもしれませんが、この破損箇所の状況がわからないままそれをやることは避けたいと思います。この漏えい箇所を修理して、そして漏えいをとめてから水位を上げることが必要だと思います。現在の注水量を決めているのは、損傷した炉心の発熱量に応じた注水量ということでそれを決めさせていただいております。

最後に、2号機でございます。30センチということで低いレベルではございますけれども、格納容器の底部に落ちている炉心は、一応冷却できているというふうに考えてございます。その状況を直接まだ確認はできておりませんが、ここの部分を確認すべくこの原子炉の真下のところにカメラを挿入するという工事も、ことしのうちには達成したいということで準備を行っています。この炉心の真下の確認につきましては、何回かチャレンジしておりますが、途中でカメラがひっかかったりしてしまったりとかいう状況でございまして、3回目のチャレンジもさせていただこうという計画でございます。

簡単でございますが、4項目のご質問についての回答でございます。

○委員長（渡辺英博君） 3番、遠藤一善君。

○3番（遠藤一善君） ありがとうございます。

凍土壁のほうなのですけれども、今言ったようなことで国が納得して、今山側ということで、まだ海側のほうのオーケーは出ていないというような報道があったのですけれども、山側のほうと側面に関しては、そういうような状態の説明で国のほうが納得して、それである程度進んでいるのかどうかということ、ひとつその国側の対応がどういうふうになっているのかというのをお聞かせください。

それから、12番の地下水バイパスの井戸に関しては、まだ到達していない可能性があるということなのですが、その以前のもが入っているということになってくる。一番怖いのは、到達したときにほかの井戸も上がって、水を流すのができなくなってしまうのが一番問題が考えられるので、なるべく早いうちにどのぐらいの年数、日数というか時間でその地下水のところまで到達するのかは、早いうちに推定をしていただいて、これが出せなくなるということになると、また相当いろんな問題が起きてくると思いますので、ぜひともその辺の見込みというか、どのぐらいで達するのかがいつごろわかってくるのかをちょっと教えてほしいということです。

それから、3号機の水の水位に関しては、水を入れていることが何に対してということがお聞かせいただいたので、それは納得いたしました。ただ、2号機のその30センチに関しては、ちょっと前にNHKでデブリが溶けていくのをCGでどわあっとやっていたのですけれども、一番下のところに上、格納、圧力容器からおりてきたものが熔岩のようにぐわあっと広がっているようなCGで出ていたもので、それがどこをやっているかということはないかと思うのですけれども、ちょっとそのような状態でいた中で、30センチしかなくてとまっているというふうになると、1号機のようにその圧力容器内の下のコンクリートのところに少し下に潜っているのでないかななんて、素人考えで。だから、30センチでも冷えているのかなというふうに思うのですが、その辺は潜っていないという想定をしているのか。潜っているとはっきりわからないから、潜っていないように書いているのか、その辺はどういう判断をしているのか、ちょっとそこだけお聞かせください。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） まず、凍土壁に関しましては、先ほど簡

単に申し上げましたような水位の調整につきまして計画しておりまして、その状況についても規制庁もご理解いただけて、着工に至っているということでございます。6月から着工させていただいておりますので、ここはオーケーが出ているということでございます。

そして、地下水バイパスの12番の井戸関連でございますけれども、まだ昨年8月のが到達していないと先ほど申し上げましたのは、大体の地下水の移動量でございますけれども、大体1日当たり10センチぐらい動くというふうに考えてございます。その地盤の中の状態によっては差があるかもしれませんが、平均的には1日10センチ。そうしますと、10日で1メートルと。100日で10メートル、1年で36メートルと、そんなような勘定でございますが、この12番の井戸、一番近いタンクエリア、H4と呼んでいるタンクエリア一番近いわけですが、百数十メートルございますので、到達には数年かかるというふうにまず考えてございます。ほかの井戸も、どんどん高くなっていってしまうというようなことも起こり得るかもしれませんが、そこはやはり各井戸の状況も毎週これ分析することにしてございますので、こういった結果を見ながら、傾向を監視しながら進めてまいりますとともに、くみ上げた水が排水の基準、先ほど紹介させていただきましたトリチウムだと1,500、これを超えることのないように運用してまいりますので、もしそのような超えるというようなことになれば、このくみ上げ自体をとめるということになりますので、トリチウム濃度の高いものの放水ということはいたしません。そういった計画でございます。

この地下水バイパスを行うことによりまして、私たち見込んでおるのが1日400立米建物の中に入り込んでいるのが300立米に減るというふうに考えてございますが、いろんな対策もそれ以外にも講じてございます。この南側の敷地全体を舗装してしまおうということで、雨水の浸入による地下水の低減とか、そういった対策、いろいろな対策を講じて地下水量を減らしていくということに向けて進んでございますので、地下水バイパスについても、井戸の状況を確認しながらこれをやってまいりたいと思います。

あと、2号機でございますけれども、あくまでその溶融していく状態というのは想像でテレビで放映されたのだと思いますけれども、誰もその状態をまだ見ていません。私たちも、これを早く見たいと思っております。冷却が行われているということは、格納容器内の温度、それから原子炉圧力容器底部の温度というものを確認しながら、十分に冷やされているということの根拠にしてございますけれども、30センチでデブリの頭が出ていないかどうかということは、まさに私たちも非常に確認したい、少しでも早く確認したいことでございますが、注水した水を上からずっといつもシャワーのようにかぶってございますので、たとえその頭が出ているというようなことがあっても、冷却はできているというふうにも思います。30センチで十分かというふうにも考えておるわけですが、これはやはり確認しなければ何とも言えないです。

1号機と2号機のその原子炉格納容器底部の部分にどれくらいめり込んでいるかというところの違いにつきましては、1号機はある程度の根拠がございまして、この1番格納容器の底部にはもともと



排水ますがございました。この排水ますは、原子炉運転中には冷却をしておりました。その冷却系統というのが格納容器の外側に通じる冷却系がございすけれども、その冷却系の水が完全に抜けてしまって、その冷却系の放射能非常に高いということで、このますの部分に入り込んでいるというのが1号機の状況でございすが、2号機につきましては、そのような状況ではないということもありまして、底部にとどまっているというふうに考えておるというところでございす。

以上、簡単でございすけれども、回答とさせていただきます。

○委員長（渡辺英博君） 3番、遠藤一善君。

○3番（遠藤一善君） ありがとうございます。

それで最後に、ここに福島給食センター起工式と書いてあったので、ちょっと質問させていただきたいのですが、3,000食というような形で新聞に報道されていたのですけれども、3,000食をつくるといって、人間も相当必要かと思うのですが、私のその今双葉郡の人、福島県内の人、県外の人をよくわからないですけれども、いわきとかそういう人たちの感情的な部分を見てみると、この大熊町の大河原地区まで行って仕事をするというふうには、はいと手を挙げる人がどのぐらいいるのかなんてちょっと簡単な疑問があるのですが、その辺の人の問題。建物は、これできちんとできると思うのですが、人の問題はどんなふうを考えているのか、ちょっともし何か。わからなかったらわからなかったでいいですけれども、ちょっとお聞かせください。

○委員長（渡辺英博君） 林室長。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） 済みません、正確なところちょっと私も承知していないのですけれども、きょう石崎が来ればしっかりとお答えできると思うのですけれども、今遠藤委員が言うとおりの、確かに本当に郡内の方が来てくれるのかということもありますけれども、我々としては、地元の雇用という面でもいろいろ施策の中で考えた一つでございすので、できればその地を今も行われていますけれども、しっかり除染したレベルで働いていただきたいという気持ちはあります。人数的には、たしか100人程度ということで今進めているようです。

実際には、給食を専門としている業者さんと、これまで行ってきてくれた地元のとり藤さんなんかにもご協力をいただくというような話で今進めていると聞いております。まだ正式に決まったわけではないのですけれども、一応順次ちょっと説明が逆になってしまいましたけれども、東双さんが頭になって、大手の業者さんを使いながらとり藤さんにもご協力をいただくという形で今考えております

○委員長（渡辺英博君） そのほかございせんか。

8番、黒沢英男君。

○8番（黒沢英男君） 2点ほど質問させていただきますが、1つ目はその多核種除去するアルプスです。今までもA系統、B系統、C系統全て停止状態で何か不安な面がありますが、ALPSのこの商品というか、この製品自体は国産品で、どこで製作しているのか。この辺、まだ例えば外国製、GEのものとか、いや、これは三菱製のものとかなんかとかいろいろあると思うのですが、この辺は何

か今までも相当停止状態に、試験的な状況でつくられているのか、まだ完全に完成されていないのかどうか。もっとも、世界でも例のないようなその除去装置ではないのかなというふうに思うのですがその辺1点と。

2点目の先ほど3番委員が凍土方式の陸側遮水壁ということで、この凍土方式というのは、非常に永久的にこれは使えるものなのかどうか。例えば10年、20年という長いスパンで凍らせて、その壁を保てるのかどうか。これは、今まで全国で海洋の開発とか何かで試験的に使われていると思うのですが、どのぐらいの期間がこの使用されていたのか、その辺をちょっと詳しくお願いいたします。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） 最初に、ALPSでございますけれども、この現在使用しているALPSにつきましては東芝製でございます。

東芝さんのほうが設置してもらっているものでございますけれども、それぞれいろんなフィルターあるいはろ過除材みたいなものを使っておりますけれども、そういったものは海外の技術もそれは取り入れて、そしてそれぞれの製品は実績あるものを使っておりますけれども、この発電所の汚染水に合うようにその組み合わせ、それから除去していく順番ですとか、ろ過するための除材、そのろ過除材の組み合わせですとか、そういったものを調整して組み合わせさせていただきます。したがって、個々の技術は実績のあるものですが、一つのこの福島第一の汚染水を処理するという品物としては、唯一のものでございます。したがって、初期故障的なそういった設備トラブルというのが必然的に起こるものだというふうに私たちはちょっと考えてしまいますが、そういったことを一つ一つ皆様の不安に通じるものでございます。そういったトラブルを繰り返すということも、してはならないことだと思いますけれども、トラブルの原因というのはしっかり解明して、そして対策を講じていくということで今後信頼度の高い設備にしていきたいと思いますというふうに思います。初期故障的なものは一通り出たのではないかとというふうに思いまして、その対策も実施いたしまして、6月中にはこの3系統とも運転再開をするという予定でございます。

あと、凍土につきましては、今回構築しようとしているのは、過去最大の規模でございます。今までの最大規模は、囲った土の量が4万立方というふうに言われておりますが、今回のものは7万立方ということで、非常に広大なエリアを囲うものでございます。今回1号機から4号機を囲う凍土につきましては、7年間これは使用する計画でございます。30年、40年これを使用しようというふうには考えておりません。この7年のうちには、先ほどの地下水の建物への流入がとめられるというふうに考えておりまして、この7年間はもつようにという設計でございます。万一部分的な損傷が生じれば、その凍結管につきましては一旦解かして取りかえをしてというメンテナンスもできるような設計でございます。過去の工事でどれぐらいの期間使ったかという、私もちょっと詳しくは知りませんが、数年程度が普通の常識的な使用期間ではないかと思しますので、7年というよりは長いほうの部類になると思いますが、その7年間しっかりとメンテナンスしながら使用できるように、そういうふう

に設計してございます。

○委員長（渡辺英博君） 8番、黒沢英男君。

○8番（黒沢英男君） 確かにALPSの問題も、恐らく世界でも例を見ないこの日本独自の機種ではないかなと思うのですが、ですから何かをモデルにしてつくったものではないから、やはり故障がいろんな部品の組み合わせ、国産品ではなくてまた海外のいろんなメーカーの具材を使ったりなんかして組み合わせてつくっているから、こういう故障等が、今試作品みたいなものですよ、はっきり言って。何かそんなようにちょっと最初ALPSが試験的、採用されてから現在まで来ている間見てみますと、そんなような感じ受けるのですが、改良に改良を加えて恐らくこれはここに書いてあるトリチウム以外の62の核種を除去すると、これはすばらしい機種なのかなというふうに私もそう思っております。

これが正常に稼働すると、例えばA、B、C3系統のうち1系統のAがトラブル起こして、2、3まで行かないような、そういうやり方をしないと、どんどん、どんどんやっぱり不安要素というのは町民のいろんな面でもう諦めというか、帰還しないと何かとか、いろんな問題が不安材料が残りますから、その辺完全なものにさせていただかないと、その辺よろしく願いいたします。

凍土方式のこの遮水壁の件に関しては、やはり今お聞きしまして最大で7年間という、今までどこかの海側でそういう何かの工事で凍土壁をつくられたケースはあると思うのですが、それは恐らくそんな長い期間ではないと思うのですが、その辺もうちょっと詳しくお願いいたします。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。座ったままで結構です。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） 申しわけございません、このほかの工事の期間につきましては、私も承知していない部分でございましたので、調べさせていただいて、また別途回答ということでもよろしいでしょうか。

○8番（黒沢英男君） はい、結構です。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） 恐れ入ります。

○委員長（渡辺英博君） よろしいですか。

○8番（黒沢英男君） はい、終わります。

○委員長（渡辺英博君） そのほかございませんか。

10番、渡辺三男君。

○10番（渡辺三男君） 本当に単純な疑問なのですが、テレビで海側の海のこの港湾のセシウムとかそういうの検査データが発表されていますよね。ほとんど検出不能で出ていないのですけれども、私不思議でしょうがないのですけれども、これだけの事故を起こして大問題になっている第一原発の構内に全く出ていないというのは、私単純な疑問なのですけれども、多少出たほうが逆に正確に調査しているのかなという疑問持っているのです。

裏話ですけれども、いろいろそういうのに携わっている人たちの話を聞くと、出ない状況になるま

で何回もくみ上げて検査しているというような状況が見られるみたいなのです。出ればだめだと、くみ方悪いというような感じで。そんな話も聞きますので、非常に単純な疑問なのですけれども、私ちよっと疑いの気持ちで考えているのです。その辺の状況を詳しく説明してください。

あともう一点、1号機から4号機までの状況に関しては、先ほど3番委員さんの質問で詳しく回答いただきましたので、わかるのですが、最後に給食センターの起工式行ったということで、地元雇用に貢献できればなということ考えているよということなのですが、地元雇用というと聞きはいいのです、聞こえは。ただ、地元雇用といいながら、あなたたちはいつも地元が一番で落とすのではなくて、どこかの大きい給食やっているような例えば千葉とか東京とか、そういう業者にぽんと出して、そこから地元に来るのです。地元は常に2番、3番、4番、5番なのです。何で一番迷惑かかっている地元が一番最初に声かからないのかという疑問なのです。確かにこれだけの100人規模からの人数、今大熊町の一部入れる地区で弁当センターを開いても、なかなか20キロ圏内の人は勤めづらいのかなとは私は思います。ただ、やっぱり一番最初におろしてくれるのは、地元であるべきなのかなとは私は思うのですが、その辺の状況教えてください。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） それでは、1点目のほうの海水等のモニタリングの結果につきまして、私のほうから説明させていただきますが、お配りした資料に添付1というのがございまして、A3の裏表になっておりますが、発電所の港湾の図がありまして、そこに丸が示してありまして、そこに分析結果ということで四角い箱が幾つも並んでおりますけれども、添付資料の1の表面は港湾の内側のモニタリング結果でございまして、裏面が港湾の外側ということでございます。

それぞれ私ども確認できた結果は、そのまま包み隠さず公表させていただいてございまして、この資料につきましては、囲い込みの中ちょっと見ていただきますと、一番右の列の下から3番目とか例えば見ていただきますと、オレンジ色の数字あるいは赤い数字で示してございます。そして、数字が2種類ございまして、矢印で左右に分かれています。左側は25年度、昨年度の最高値でございまして、決して不検出ではなくて、放射性物質が検出されてありまして、その昨年の最大値を載せております。一番濃いやつは、全ベータというのが1,400という赤い数字がお目にとまるとは思いますけれども、下から2番目の囲いの中ですけれども、そういった過去最大値、それから現在の最新値ということで右側にお示ししてございます。やはり事故のときに海に汚染水を漏らしてしまいました。その影響が残っておるということでございまして、汚染水の漏れは当時とめましたが、その汚染水がもとで地盤が汚れていると。その影響で海側にしみ出ているということは、昨年の夏に私たちも確認して、それ以降ずっとモニタリングの結果を公表しておりますが、大分薄まってはまいりました。いろんな対策をしてまいりましたので、薄まってはまいりましたが、決してまだゼロではないという状況でございます。これは、今後もこのような結果につきましては継続的に分析、それから公表というこ

とを続けてまいります。

港湾の内側で最も濃いところ、現在200という赤い文字が出ていると思いますけれども、これ徐々にまた低くなっていくというふうを考えてございます。赤い数字は、法令の告示濃度限度というものを超えているものでございます。それから、オレンジ色につきましては、WHOの飲料水ガイドラインの数値を超えているものということで見やすく表示しているものでございます。黒い文字は、それぞれの基準の中にあるというものでございます。

モニタリングにつきましては、以上でございます。

○委員長（渡辺英博君） 林執行役員。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） 2点目の地元雇用、給食センターに絡んだご質問いただいておりますが、我々とすれば、やはりこれまで安全管理の中でも地元でやっていただけるものは、最優先に地元雇用ということでやってきたつもりでありますけれども、そうではないというご意見も聞くところもございますので、そこは我々としてはこれだけご迷惑かけました地元に対して、今後ともしっかりと地元優先に発注できるものはしていくというようなことになるかと思っています。これまで発災以降も、事務用品も含めていろいろ地元企業の皆様にお世話、ご協力いただいておりますという実態もございます。

今回の給食センターにつきましても、細かいあれはちょっとあれですけれども、多分一番最初に想定したのは、やはりとり藤さん、固体名出してあれですけれども、とり藤さんあたりを頭にしたのだと思うのです。やはり3,000食というような食を用意していただかなくてはならないということで、今とり藤さんを含めた業者にいろいろ相談を持ちかけているというような状況になっているのが実態でございます。私のところにも、双葉郡以外に幾つもの複数の業者さんから問い合わせがあってお話を聞いておりますけれども、まずは地元を優先させていただきたいということはお話をさせてもらっております。また、食材についても、これ福島県産品ということになりますけれども、できるだけ地元のものを使わせていただくというような方針で今進めているということでございます。

また、何かありましたらいろいろアドバイスいただければありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

○委員長（渡辺英博君） 10番、渡辺三男君。

○10番（渡辺三男君） ありがとうございます。

ぜひ港湾の検査データですか、今林さんが言うようにそうやってぴしっと出していただいているということですので。ただ、シルトフェンスで囲っている部分の中は、かなりやっぱり先ほどの説明どおり赤い数字出ていますが、表にはほとんど出ていないのです、赤い字、全ベータで全項目にあるくらいで。シルトフェンスとは、そんなに効き目あるのですか。海の中にカーテン張っているのでしょうか、そういうこのシルトフェンスの能力、外部に漏らさないための能力どの程度、これで見るとかなりすごいもう役目を果たしているのかなと思いますが、その辺ちょっと詳しくお教えくださ

い。

あと、給食センターの件に関しては、ぜひそういうふうにやっていただければありがたいのですが聞くとところによると、先ほど言ったような外部から名前出ていますけれども、とり藤さんとかそういうところに人集めてくれないかという依頼が来ているみたいですので、私は逆だと思うのです。その実態が真実かどうかはちょっとわからない部分がありますが、ただ私のつかんでいる情報は正しいのかなと私思っていますので、そういう質問させていただきました。できるだけやっぱり地元雇用を言うのであれば、まず先に地元が一番で声かけてほしいと、そういうお願いです。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） シルトフェンスの効果でございますが、水溶、水に溶けた放射性物質を食いとめることはできません。濁り成分、土が舞って水の中濁ると、そういったものはとめられますけれども、このシルトフェンスそのものでは食いとめることができないというものでございます。

数値が下がっておりますのは、いろんな対策を陸側でやった結果ということでございまして、この護岸のところが汚れております。この護岸が汚れているのは、汚染水が地下にある配管とか電線管を通していたトンネルの中に残っていたと。それが土壌のほうに移行していたということでございまして、そこの汚れた護岸の部分に地盤改良で地下にまた壁をつくりまして、これは凍結ではなくて水ガラスという薬剤を入れて壁をつくりました。壁をつくって、その内側を汚れた地下水をくみ上げてタービン建屋のほうに移送するというのをやって、海への流出を少しでも抑えるという対策を講じてまいりました。そういった結果、だんだん下がってきているということでございます。汚染水が残っているトンネルの中の汚染水の除去につきましては、今取り組んでおる最中でございまして、そういった対策いろいろなことをやりながら、だんだん下がってきているというものでございます。そして、この四角の下から2番目につきまして1,400という値が出ていました。この地点につきましては、もう既に埋め立てをしてしまいました。海側遮水壁の内側でございしますので、ここはもう既に分析はしていない。現在はしていない部分でございすけれども、参考値で一番最近まで分析した結果が200という数字が赤い文字でありますけれども、これは載せておりますけれども、現在はここ埋め立てをしてしまっているんで、その外に漏れることはないということでございます。この下から3段目のまだ31というふうに数字が出ていますけれども、これも海側遮水壁がしっかりと構築されれば、もっと下がるものというふうに考えてございます。こういったこと、今後も分析結果につきましては、隠さず公表させていただきます。

シルトフェンスにつきましては、水溶性の放射性物質が防御できるものではないということでございます。

○委員長（渡辺英博君） 10番、渡辺三男君。

○10番（渡辺三男君） ありがとうございます。

今説明のとおり、海側パイル打って今埋め立てている最中だということで、九十何%かということ、そういうのがいい結果につながっているということだと思いますが、いかにせん全体で出てくる汚染水の量は、いつになっても変わらないということで、遮水壁や凍土壁やいろいろな手を尽くして海に漏らさない方法を考えている。また、建屋に入らない方法を考えているのでしょうけれども、依然としてタンクの水漏れとか、そういう部分がいつになってもとまらないのです。そういうのが全て地下に入っていくということになっていきますので、ぜひ弁のあけ違いとか閉め忘れとか、人的な被害はできるだけ起きないように教育をしっかりしていただければありがたいと思います。

また、給食センターに関しては、よく内容を精査していただいて、私が言っているような状況だとすればぜひ、恐らく東京の会社に発注しても、東京からは人来ないと思うのです。当然これは、地元とか地元周辺市町村から人を集めてくるようになると思いますので、それだったらやっぱり地元が発注して、これだけ我々は苦勞している中で地元にもう少し目をやっていただければ、少しほっとする面が出てくるのかなと思いますので、ぜひ要望しておきますので、よろしくお願いします。

○委員長（渡辺英博君） 要望ですか。

そのほかございませんか。

9番、高橋実君。

○9番（高橋 実君） 10番委員とちょっと重複するのですがけれども、港湾内の海底。震災後どのような手だてをしたのか。もしセメント処理とか、セメント、ガラス併用して表面をコーティングして浮き上がらないように処理しているのだから、もししているのであれば、それがいつごろまで、5年もつのか10年もつのか、あわせて教えてください。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） ちょうどこのモニタリングの図でございませうけれども、港湾の絵がございませうので、1号から4号機の取水口、ここ少しグレーで塗りつぶしています。それから、5号機、6号機の取水口、これもグレーで塗りつぶしています。この塗りつぶしている部分は、海底土の被覆が完了してございませう。これ、モルタルで固めています。2層に分けて工事をしましたけれども、モルタルで固めているというのが実情でございまして、これどの程度の効果かというのは、厳密には確認できていないところがございませうけれども、シルトフェンスでその内側囲っていますので、土の舞い上がりということが防げているとともに、モルタルで固めているので、外に出てくることが防げているということだと思っております。今後は、港湾全体を海底土の表面を同じように被覆する予定でございまして、その工事にも着工してまいる予定でございませう。

これがどれくらいもつかというのは、ちょっと申しわけありませんが、モルタルですので、かなり長い期間これ被覆を継続して行っているものだというふうに考えます。年数までは、申しわけありませんが、ちょっとお答えできないのですけれども、申し上げたかったのは、部分的な海底土被覆は終わっている。それから、港湾全体を今後被覆していきますということでございませう。

○委員長（渡辺英博君） 9番、高橋実君。

○9番（高橋 実君） 一般的に考えると、塩害には弱いというのが常識なのだけれども、セメントは。セメントにもいろんな種類あるし、特徴のことを考えて特殊な配合してやっているのか。また、どのぐらい実際は5年置き、10年置き、場合によっては津波とか地震によってクラック入って、どういう管理の仕方しているのかなというのがあったから、ちょこっと前にやったものか、質問した経緯もあるのだが、私。

だから、その後何だか随分進んでいないみたいだから、進んでいないみたいでこういう数値が出てくるから、私もあれれと思ったのだけれども、これいま少し本腰入れて、港湾全部やるのならやる。やるにして、どういう処置をしたほうが5年でも10年でも30年でも安心していただけるのだから、いま少し技術的なことを、技術屋さんいるのでしょう、ここ凍土壁関係もやっているぐらいだから。いま少しこんな6号だの何号だの止水だけ2層やりましたでなく、せめて港湾内しっかり固めるような考えは持っていないのか、これ誰答弁できる。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） 港湾全体を今後やっていく予定でございます。

どんな材質のモルタルかというところまでは、ちょっと申しわけございません、私も詳しくなくてお答えできませんけれども、もし必要であれば、また詳しい者も連れてまいりますので、こういった港湾内のモルタルでの表土の被覆ということについても、詳しくご説明することは可能でございます。どうかよろしくお願いします。

○委員長（渡辺英博君） 9番、高橋実君。

○9番（高橋 実君） とにかく可能性あるやつは、先に潰していくように。お隣まで行かなくても、港湾口から波が入ってそこ洗われて、そこに蓄積した高濃度なものを、どれだけ高濃度だかはわからないけれども、そういうものが上がってきて、はかってみたら一気に30倍も100倍も上がったというとまたこれ大騒ぎの種になるから、可能性があるやつは前向きに処理してもらいたいのだけれども、どうですか。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） おっしゃるとおりでございますので、最も汚れている部分につきましては、既に被覆は完了してございますし、今後残っている港湾の内側につきましては、全体を固めてまいります。

あとは、懸念はお魚の出入りですとか、そういったことも防止をしてまいるところでございますので、港湾の内側の魚類の捕獲ですとか、それから港湾口を魚が行き来しないような対策、網を張ってそういったこととか、並行して実施してございます。

優先的に実施しました1号機から4号機、それから5号機、6号機のところの取水口の海底土の被



覆によりまして、現状汚れている部分は1から4号機の部分の海水の汚染の状態は確認できていますけれども、それ以外の部分にその汚染が広がっているという状況ではございませんので、優先的にやった被覆の効果というはあるというふうに考えております。

○委員長（渡辺英博君） 専門家がいないということですがけれども、次の委員会までしっかり文書なりなんなりで9番委員のほうに質問の回答お願いいたします。

そのほかございませんか。

〔「なし」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） なければ、次に福島第一原子力発電所个体廃棄物、最後に作業員死亡災害についてを説明を求めます。

林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） それでは、残念ながら死亡災害が起ってしまいまして、その状況につきましてご説明させていただきますが、詳しい原因と対策につきましては、まだ現在警察、それから労基所の捜査を受けている段階でございますので、その捜査には私も全面的に協力というか、全面的にその調査への協力をさせていただくとともに、明確になりました原因につきまして対策を講じていきたいということで考えております。

本日は、どんな災害だったかというご説明の内容になってしまいますけれども、ご紹介させていただきたいと思います。表紙めくっていただきまして、裏面工事概要ということで、固体廃棄物貯蔵庫の関連施設修理工事という工事件名でございまして、工事期間が今年の11月から5月というものでございます。これは、工事の目的としましては、いろんな発電所廃炉工事に伴いまして発生します瓦れき、これを瓦れきの高線量のものを保管する設備としてこの建物を使いたいということがございましたが、災害によりまして基礎のくいにひび割れ等の損傷が見られると。写真がここに用意してございますけれども、ひび割れがあります。この基礎ぐいを補修するという工事のため行っていた作業でございまして。

資料2枚目、ちょっと省略させていただきますけれども、先ほど口頭で申し上げましたので、省略させていただきますが、資料の2枚目の裏面、シート3のほうでございまして、災害起こりましたのは3月28日の14時20分でございます。残念ながら、被災者の方はお亡くなりになりました。この基礎ぐいの調査のために、そこの部分を掘削していたという作業でございまして。その掘削時に、ならしコンクリートというのがそこに埋まっていたということで、これにつきましてハンマードリル等で碎いているという作業をやっていた最中、それが崩落したということでございます。時系列がございまして、こちらのほう災害発生前、それから発生直後、それから病院搬送といった行程を時系列でお示ししてございます。

続きまして、シート4でございまして、配置図でございましてけれども、1号機から4号機、それから5号機、6号機と発電所の中でございますけれども、高台の5号機、6号機に近いほうがその建物が

あるほうでございます。これ、35メートルの高台でございます。固体廃棄物貯蔵庫、空コンテナの倉庫という名称の建物でございます。この基礎でございます。免震重要棟も近くでございます。右側の平面図でございますが、基礎ぐいの部分、赤丸の部分がその位置でございます。写真が2枚ございますけれども、下の図がその掘り下げていた部分の写真でございます。そこにコンクリートの固まりが落ちていますが、こちらが落下して被災したということでございます。

続きまして、シート5でございますけれども、写真でございますが、左側の写真、ならしコンクリートということで赤く囲ってございます。こちらのほうの掘削をしていたところ、崩落してその下敷きになってしまったというものでございます。

シート6につきましては、作業員の配置図でございます。右側に写真があるように、掘削と泥の運び出しというものを手分けをして実施していたということでございまして、左側の図の赤い人の図がございすけれども、これが被災された方のいた位置でございます。

資料最後のシートでございますが、シート7でございます。縦断面図でございますけれども、このような図でございまして、下から掘削をやっていたということでございまして、土砂とコンクリート片、両方が崩落いたしまして、その下敷きになってしまったというものでございます。

状況につきましては以上でございまして、先ほども申し上げましたように、今捜査中ということでございますので、それによって明確になりました原因と、それに対する対策ということを今後講じてまいりたいというふうに考えてございます。

以上でございます。

○委員長（渡辺英博君） それでは、説明が終わりましたので、質疑に入ります。ご意見ございませんか。

副委員長。

○副委員長（安藤正純君） 時系列のところちょっと見てください。

災害発生が14時20分です。それで、救急車要請が15時2分、この間42分あるのです。それで、この作業見ると、補助作業員とか1人の作業ではなくて作業の仲間がいるはずなのです。これだけの事故が起きて、救急車を要請するのに42分もかかるというのはどういうことなのかなと。

それで、時系列の中に人命救助が優先なのか、またその福島第一対策本部への連絡、上司へ報告するのが優先なのか、これ疑わしい。人命が優先であれば、まずは救急車手配、人を助ける、そっちのほうの優先になるのかなと思うのだけれども、東京電力のこの体質がどうなっているのか。緊急時労災事故発生した場合のそのマニュアルの中に、やはり助けるということが優先になってくるはずなのだけれども、この42分というのはどういうふうに解釈すればいいのかお答えください。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） ご指摘のとおり、救急車の要請までは時間がかかっています。

その間、私どもの発電所の救急医療室というのがございまして、そちらに搬送いたしまして、ここで医師による診察、それから確認をしていただいております。何分発電所の工事でございますので、特別な対応ということで医師が常駐してございます。そこにまずは運び込んで確認をしてということでございます、決してその救急車要請を軽んじているわけではございませんけれども、そのような状況で、まず医師による確認というのを最優先に対応しておりますので、その医師の判断で救急車を要請したということでございます。結果として、その発生から大分時間がたっているという、ご指摘のとおりでございますが、状況に応じまして私どももドクターヘリを要請したり、いろいろ対応しておりますので、決してこのとき要請がおくれたとか、そういうふうなことではないというふうに考えてございます。

○委員長（渡辺英博君） 副委員長。

○副委員長（安藤正純君） 今の説明で、医師が常駐して医師の判断で救急車要請したと今おっしゃっていますけれども、その医者がいる救急医療室（ER）入室、これが14時57分で、事故発生から37分たっている。

決して人命を今軽んじていないと言っていますけれども、そういう事故が起こって37分もたって医務室に連れて行って、その間に対策本部に連絡とったり、対策本部に連絡とる前に医務室ではないの。まず、人命を軽んじていないというけれども、医者のいるところに連れていくのに37分もかかっているのに、何で軽んじていないと断言できるのですか、この辺もう一回答弁してください。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） 私どもそのERに運び込むには、発電所にある救急車を使って運び込むわけですが、連絡を受けますと私たちもやはり真っ先にそれ対応しますし、当時考えますと、大きなコンクリートの塊の下敷きになってございますので、そこから助け出すというそういう行為と、それから連絡、それから搬送ということをやっていたというふうに考えてございまして、決して放置していたということではございませんので、その辺誤解のないようお願いいたします。

○委員長（渡辺英博君） 副委員長。

○副委員長（安藤正純君） 私は何もしないで、救助もしないで放置したとは言っていない。誰が見ても、これは重大な労災事故だと現場で判断できれば、救急車の要請はもっと早くできたのではないの。

1F構内で措置できるのであれば、救急車は要らない、あそこが総合病院並みの治療の設備があれば。行く行くは搬送して救急車を要請するのであれば、救急車の要請はもっと事故発生から3分、5分の間に、救助作業をやっている最中にだってもう要請はできる、そういうことを言っている。連絡体制、緊急の要請体制が遅過ぎる、そのようには思わないのですか。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） こういったような災害が起きれば、直ちにやはりそういった要請はしてございます。

先ほど申し上げましたように、緊急時対策本部に連絡が入りますと、あとドクターヘリの要請ですとか、そういったことも現状実施しておりますので、このときは確かに50分程度かかってございますけれども、決してそういったゆるゆるとした対応しているわけではないということでございます。

○委員長（渡辺英博君） そのほかございませんか。

9 番、高橋実君。

○9 番（高橋 実君） これ、土どめ材コンパネ使っているのだけれども、6 ページ、7 ページ、4 ページと写っているのだけれども、これ土どめ設置の順番どういうふうにしたか教えて。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） この土どめの工事工程でございますと、私も詳しいところまでは存じ上げませんで、申しわけありませんが、別途回答させていただきたいと思います。申しわけございません。

○委員長（渡辺英博君） 9 番、高橋実君。

○9 番（高橋 実君） 今言ったページのこれ内側のコンパネ見ると、余りにもきれいなのだ。後で真っさらのやつ持ってきて、押っつけて写真撮ったようにしか見えないので、工程している土どめの設置、順番、後教えてください。

○委員長（渡辺英博君） 林副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（林 幹夫君） 後から工作ということはございませんので、しっかりとその辺の説明別途させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○委員長（渡辺英博君） これも、しっかり文書で回答をお願いします。

そのほかございませんか。

〔「なし」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） なければ、福島復興本社における取り組み状況について説明を求めます。

武井副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（武井澄男君） 済みません、復興推進室武井です。お手元のほうに資料ございます福島復興本社における賠償・除染・復興推進に関する取り組み状況というところでご説明させていただきます。

これは、前回の特別委員会で早川委員のほうからご意見をいただきまして、この3つ、賠償、除染、復興推進に関する状況を資料で示せというお話がございましたので、今回この取り組み状況と、その下にちょっと厚目ですが、福島の復興が私たちの原点ですという参考資料、それと最後に賠償に関する富岡町様に係る賠償関係の状況という3点をご用意させていただいております。それで、取り組み状況について若干ご説明をさせていただきます。

こちら、6月10日付ということになっておりますが、これは復興本社の定例会見がございまして、そちらのほうで定期的にこちらのほうを公表させていただいております。それを今回加工しまして、この特別委員会用につくらせていただきました。それによりまして、次のページを見ていただきますと、直近の進捗状況ということで原子力損害賠償の進捗状況、これ全体でございまして、個人及び法人・個人事業主などということで分けてございまして、ご請求件数、個人が約60万5,000件、法人・個人事業主などが25万8,000件という形でお示しをしております。また、賠償の状況ということで、本賠償の金額が個人では自主避難を除きまして約1兆6,018億円、法人・個人事業主などが約1兆7,324億円という状況になっております。そして、下のほうが本賠償の金額、仮払い補償金も含めましてお支払い総額としては約3兆8,000億円と。5月23日現在ではございますが、そういう状況になっております。

そして、次のページでございまして、こちらが個人の方にかかわる項目、法人・個人事業主の方にかかわる項目ということで、項目別な実績の金額を出させていただいております。こちらは、1ページ目に金額が似ておりますが、振り込み手続中のものも含まれるため、1ページのお支払い金額と必ずしも一致はしておりませんが、約3兆8,000億円という内容でございまして。

また次のページ、3ページのほうに参りますが、除染推進活動の実績としましては、除染活動は大きく分けて2つございます。除染特別地域での取り組み、こちらのほうは富岡町様を初め旧警戒区域と計画的避難区域の11市町村が対象ではございますが、環境省から当社が委嘱を受け、国が除染を行う業務に対して放射線管理、モニタリング、除染等に関する技術面での対応ということで、今までの活動人数が約2万人という活動をしております。そして、もう一方が汚染状況重点調査地域、これが福島県内の40市町村での取り組みになりますが、こちらは市町村が中心となつて行う業務にしまして、環境省から当社が委嘱を受けて同じようなモニタリング、除染等の技術面での対応をさせていただいております。その3ページの下のところになりますが、具体的な除染推進活動ということで、これは田村市の場合、その次が大玉村の場合ということで、重点調査地域のほうの対応状況を示しておりますが、説明は割愛させていただきます。

また、5ページになりますが、除染推進活動状況につきましては、技術検討への取り組みというのもやっております。これは直近の取り組みということでは、指向性モニタリング装置の開発、NaIシンチレーション式サーベイメーターにつきまして、指向性を持ったモニタリングができないかということで技術開発を当社が共同して行っております。その下のページでは、指向性ができたことによって、全体の線量というよりも一方向、どこの部分が一番高いのかをよくわかるようなモニタリングの仕方ができるようになったという内容でございまして。

その次のページ、6ページでございまして、同じく除染推進の活動の一環としまして、滞留堆肥の解消促進に向けた取り組み。牛ふんの堆肥等が滞留している。これは、1キログラム当たり400ベクレルを超えるその暫定許容値を超えないものです。超えないものにつきましても、なかなか処理が進

まないというところで、当社が仲立ちをしまして、その処理をしていただけたところと実際に困っているところをマッチングさせて処理をさせていただいているという状況でございます。

そして、7ページ目、こちらのほうは復興推進活動実績ということで、現在までの主な取り組みとしましては、これは4月分の活動実績ではございますが、この中でいいますと、富岡町様は表の中段にございます屋内清掃、片づけというところで主に活動をさせていただいております。ちなみに、富岡町様の復興本社ができてから今までの取り組み、5月末現在では、屋内清掃約200件受け付けさせていただいております。今後も、9月ぐらいまではほぼ毎日受け付けが既に予約で入っているという状況でして、今までの5月末までで当社約2,000人の社員がこの富岡町様の清掃の取り組みに参加させていただいているというところです。富岡町様につきましては、このほか墓地の除草、あと4月に行われました桜の集い等にも、当社の社員が参加させていただいているという状況でございます。7ページ下の部分でございますが、これは南相馬市内の活動状況ということで、こちらは営農の再開に向けたご協力をさせていただいているということで、今後も富岡町役場ご当局様とも相談しながら、いろいろな活動を富岡町様でもやっていきたいと思っております。

その次の厚い冊子の部分は、主にどんなことをやっているかという写真集でございますので、説明は割愛させていただきます。これでイメージを持っていいただければと思います。

それと、最後の資料としまして、賠償関係の状況でございます。賠償実績ということで、5月31日現在の個人本賠償、ご請求率ということで右側のほうに書いてございますが、97.7%。財物に関しましては、そこに書いてあるとおりの件数、及び法人・個人事業主様及び農業に関しましても、その下の表でお支払い完了率92%並びに86.2%の数値で推移しているというところでございます。

説明は以上です。

○委員長（渡辺英博君） それでは、説明が終わりましたので、質疑に入ります。

9番、高橋実君。

○9番（高橋 実君） これ、ぜひとも東電のほうで責任持ってやってもらいたいものだけれども、要望も何もやってもらいたいのだ。

困難区域の墓地、一応は全部除染関係はやったのだろうけれども、困難区域はなかなか入られる場所でないから、年に3回ぐらいか、盆前とか彼岸、中日前とか、それに伴う町道に限らず幹線から入る道路の除草関係、駐車する駐車場スペースとか、全部困難区域まず見直してもらって、必ず東電の責任でやってもらいたい。どうですか。

○委員長（渡辺英博君） お願いします。

武井副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（武井澄男君） 武井です。帰還困難区域の中の墓地及び進入道路等の除草ということでございますが、そちらにつきましても、環境省さん及び町ご当局様とよく相談しながら進めさせていただきたいと思っております。

というのは、実際にその出たごみをどういうふう処理していったらいいかというのは、当社単独ではできないところもございますので、ご意見として承るとともに、前向きに対応したいと思っております。

○委員長（渡辺英博君） 9番、高橋実君。

○9番（高橋 実君） ご検討でなく、やってくれと言っているのだ。

関係省庁とか出先と協議するのはそちらの勝手。やれと言っているのだ。できるかできないかだけでいいのだ。

○委員長（渡辺英博君） 武井副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（武井澄男君） やっていきたいと思います。

○9番（高橋 実君） 終わります。

○委員長（渡辺英博君） そのほかございませんか。

4番、宇佐神幸一君。

○4番（宇佐神幸一君） 2点ほど聞きたいのですが、こちらの資料の中のまだ請求されていない方いらっしゃるということで記載されているのですが、実際的にこれはどういう状況で請求されていないのか。

簡単に言いますと、今私の中で困っているのが高齢者の方で入院されたり、またいろんな面でその請求するような場所に行けないという場合の対処の仕方は、たしか訪問とかされてやっていると思うのですが、そういう状況以外で何か特別でやっていてできないのか、そういうものをちょっと教えてください。

それとあと、今出ました墓地の件の、まだ決まっていないと思うのですが、墓地自体の財物は前お話ししたとき財産だと。個人の財産だということで回答はいただいているのですが、なぜ修理費が出るのではなくて、全体的に財物の補償に組み込めないのか、その2点教えてください。

○委員長（渡辺英博君） お願いします。

○福島復興本社福島本部郡山事務所長（野口栄一君） 郡山事務所の野口でございます。まず、まだご請求されていない方の件でございますけれども、おっしゃるとおりこちらは仮払いをされた方のうち、まだ未請求の方が383名ということでございまして、これにつきましては今メディアを使ったり、電話をしたり、そういう対応をしております。それで、窓口等に来れない、また電話もできない方については、ほかの方からのご要請があれば、個別に対応もさせていただいています。

また、ほかに仮払いもされていない方もいらっしゃるというふうなこともあるのではないかとということでございますので、ここにつきましては、富岡町様と一緒にになりまして、そのところの対応につきましては今検討中でございます。

2点目、墓地のことでございますけれども、墓地と墓石については別という形で、今検討中でございまして、最終的にどういうふうになるかというのは、ちょっと今この時点ではお答えできないとい

うことで、申しわけございません。

○委員長（渡辺英博君） 4番、宇佐神幸一君。

○4番（宇佐神幸一君） されていない方ということで今説明いただいたのですが、確かに仮払いやってとまっている方も多いと思うのです。

ただ、この事情いろいろあるかと思うのです。ですから、それやっぱりしっかり調査していただいて、できるだけ請求ができるようにご指導していただくのはもちろんだと思うのですが、全然やっていない方も確かにいると思うのです。それ、やっぱり綿密に調査をしていただいて、掘り起こしていただいて、請求をしていただくように努力していただくのは東電の仕事だと思っておるので、それはやってください。

それとあと、実はあの、ちょっとお聞きしたのですが、宗教界の会にお聞きしたのですが、墓地についての財物は、その墓地自体の石は本来買ったものとその状況によって目引きしないと。賠償については、基本的に目引きした分について、震災後目減りした分については賠償するけれども、墓地自体石は目減りしないのだと。では、そこにセシウムによりその放射性物質かかった場合は質が落ち、またその価格が落ちるのではないかと、評価が落ちるのではないかといったら、除染やるからそれは落ちないというような回答も出ているのです。実際的に、だけれども、そこに行けなくて、その行けないという精神理由も一つの墓地の評価の低下にもなるのではないか。だから、一つの案として財物の、墓地の平均単価を出して、それを一つの財物として一律墓地持っている方々賠償して、それで足りない分は補足として高額のものの財物として補償できないのかといったら、それもできません。実際的に今回墓地という形については、一切手つけないで何が根本なのかということを思ってお聞きしたのですが、今言ったことでははっきりしたことが出ていないのですけれども、これからどう考えていくのでしょうか。

○委員長（渡辺英博君） 野口事務所長。

○福島復興本社福島本部郡山事務所長（野口栄一君） 墓石に関してにつきましては、墓石以外にも庭石等も含めて、確かに石自体の価値が清掃等で落とせば価値減少はないということでご説明、ご案内をさせていただいております。

ただ、墓地自体の評価等につきましては、今の時点で申しわけございませんけれども、ちょっと私のほうからでもご説明できるところはございませんので、申しわけございません。

○委員長（渡辺英博君） ただいまの議案の件と、あと東電に対するその他の件と次がありますけれども、皆さんの発言何人くらいいらっしゃいますか。

〔何事か言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） それでは、13時まで休議いたします。

休 議 （午後 零時01分）



再 開 （午後 零時 5 8 分）

○委員長（渡辺英博君） それでは、若干定刻前でございますが、全員そろいましたので、再開いたします。

4 番、宇佐神幸一君。

○4 番（宇佐神幸一君） さっきご説明いただいたのですが、ですから基本的に補償については、前々から議事録にも載っていますけれども、個人の財産であると認めているなら、いろんな補修費を出すとか移転費を出すではなくて、一律墓を持っている方については、ある程度の基準内容をつくって、それでその後賠償すると。財物で賠償するというのが本来の趣旨だと思うし、なおかつそういう形で東電のほうも補償相談室と話しながら、協議しながらそれは進めるべきでないかということ、最後なので、もう一度強く、検討よりも強くやっていただくように検討していただくことで私の質問は終わります。

○委員長（渡辺英博君） どなたが答えますか。最後ですので、一番偉い人、林執行役に答弁願います。

〔「賠償担当だ」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） 野口郡山事務所長。

○福島復興本社福島本部郡山事務所長（野口栄一君） いろいろ検討中なのは確かでございますけれども、墓地及び墓石につきましては、賠償することは賠償させていただくという方向で進んでおります。

細かいところにつきましては検討中で、この場で申し上げられませんので、申しわけございません。

○委員長（渡辺英博君） そのほかございませんか。

8 番、黒沢英男君。

○8 番（黒沢英男君） 1 点だけ伺いしますが、7 ページの現在の復興推進活動の実績ということで、現在までの主な取り組み状況ということで、屋内清掃、片づけは 9 月ぐらいまで予約がいっぱいだというふうに聞いておりますが、いつごろまでこれを継続してやるのか。

また、まだ例えば屋内清掃、片づけというのは周知徹底されていなくて、最近になってどんどん、どんどんふえてきていると思うのです。ですから、できればあと 1 年とは言わず、ずっとその要望があれば、住民から要望があれば続けていってもらいたいと思うので、その辺の考え方、これからの取り組みについて伺います。

○委員長（渡辺英博君） 武井副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（武井澄男君） ご質問ありがとうございます。

こちら屋内清掃につきましても、町ご当局といろいろ相談をさせていただきながらやっております。その中で、町の避難住民の皆様のニーズもお聞きしながら、決して途中で打ち切ることではなくて、最後の帰還の支援、移住の支援というところで、私どもはできることは最後までやらせていた

だきたいと考えております。

○委員長（渡辺英博君） 8番、黒沢英男君。

○8番（黒沢英男君） 現在まで屋内のそういう片づけとか清掃とか、富岡町は約200件とお伺いしますが、やはり富岡町の件数、まして帰還困難区域の場合においては、まだまだ状況が相当厳しいのかなという感じが受けられるのですが、その辺も。

それともう一点、9月ごろまでは予約がいっぱいだと聞いているのですが、例えばこれから申し込んでその中に食い込めるのかどうか。9月以降になってしまうのかどうか、その辺伺いたい。

○委員長（渡辺英博君） 武井副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（武井澄男君） 今現在9月まで入っておりますので、キャンセルとかそういうのが出た場合には埋め込むということはできると思いますが、基本的には今申し込みいただいても9月以降の清掃ということになると思います。

それと、既に帰還困難区域も含めて屋内清掃させていただいております。

済みません、先ほど高橋委員のほうからお話あった墓地の除草につきましても、私勘違いしております、まして、帰還困難区域も含めて既に昨年7月、8月で行っております。今回高橋委員からのご要望、墓地の清掃、草刈りということだったと思いますが、ことしも同じようにその清掃は帰還困難区域も含めてやらせていただきたいと考えております。

○委員長（渡辺英博君） 林執行役員。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） 黒沢委員からいただいた屋内清掃ですけれども、これは1年で区切るというようなことは我々するつもりは全くありません。今武井が答えたとおりでございます。

一番ニーズが高いのは、多分今富岡の町民の方が申し込まれてきているのは、我々の事故でなかなか立ち入れなくて、自分の家に戻ったときに余りにもちょっと汚れ、小動物で汚されたり、いろいろされておりますので、そういったところをまず片づけるということを優先にされているのかなと思っているのですけれども、さらにやはり帰還するということになると、新たにまたご要望が出てくるのではないかなと思っていますので、我々としてはそういう要望がありましたら、できるだけ対応していくという方針でございます。よろしくお願ひしたいと思ひます。

○委員長（渡辺英博君） 8番、黒沢英男君。

○8番（黒沢英男君） 先般説明ありました灯油等、ないし燃料等、ガソリンとか灯油等、危険物、やはりまだ一番そういうのが優先して取り組まなければならない問題ではないかなという感じもするのです。

少々例えば18リッター二、三本であれば、これは何も頼む必要もないのですが、大量のやはり灯油となると、どうしてもトラック等で運ばないと、スタンドに持っていかないとどうしようもないですから、それでましてや18リッター缶に10本も20本も……20本ぐらいあれば、何とか処理できるのか

なという、そういう状況下に置かれているうちというのは、まだまだあると思うのです。そういうの、やはりその9月まで予約いっぱいだからということで受け入れできないような状況だと、非常に困るのです、住民とすれば。その辺を重点的にその辺のことをやっぱり配慮しながら、昨年12月から活動実績延べ人数を見ても、恐らくこれは延べ人数ですが、相当な人員がいると思うのです。その辺のことは優先できないのかどうか、最後に伺っておきます。

○委員長（渡辺英博君） 武井副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（武井澄男君） 灯油の処理ということでの質問だと思います。

これ、ほかの町ともご相談をさせていただいているのですが、まずその灯油を処理する、どこに処理をして受け取ってもらうかというようなことも含めて関係箇所と相談をさせていただいております。そこが決まりましたら、その運搬とかそういうところで私どももお手伝いできるかどうか含めて、これも町ご当局とご相談をさせていただきながら、屋内清掃とは別に考えていければなと思います。

○委員長（渡辺英博君） 答弁漏れ。

○8番（黒沢英男君） ちょっと申しわけないのですが、この灯油等を廃棄処分するというのは、東京電力で頼めば、依頼すればできるというような先般の回答ではなかったのかなと思うのですが、どうなのですか。

○委員長（渡辺英博君） 武井副室長。

○福島復興本社福島本部復興推進室副室長（武井澄男君） その処理については、できるという回答をした記憶はないのですが。

○8番（黒沢英男君） それとも、町当局、生活環境課ではないのか。どこか。

○委員長（渡辺英博君） 生活環境課長。

○参事兼生活環境課長（横須賀幸一君） 済みません、灯油の処理につきましては、今田中スタンドのほうで処理をしていただいております。

基本的には持ち込みということになっていますので。ただ、会社のほうで屋内清掃等でしていただいたときに、灯油缶に入れて運ぶというような形で現在進めております。ただ、ガソリンについては危険物という形で、まだ今のところ検討中というところで、灯油、軽油については処理をしてございます。

以上です。

○8番（黒沢英男君） 終わり。

○委員長（渡辺英博君） そのほかございませんか。

〔委員長、ちょっと待って、今の件で〕と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） はい。

○議長（塚野芳美君） それ、委員会の話と若干違うので、だからちゃんときれいに整理しなくては

だめです。

灯油も危険物ですけれども、灯油、軽油、重油、廃油、これは持ち込みで、量が多かった場合には電力のその片づけのほうと相談して進めるというふうに委員会で答えているのですから、整合性がないですけれども、どうなのですか。

○委員長（渡辺英博君） 生活環境課長。

○参事兼生活環境課長（横須賀幸一君） 申しわけございません。

今議長の言ったとおりでございまして、ガソリンを除いたものといいますかについては、全て持ち込みという形で現在進めてございます。ただ、多い、ドラム缶等大きいものについては、移しかえながら処理するということでは現在進めてございます。今議長の言ったとおりでございまして。大変申しわけございません。

○委員長（渡辺英博君） よろしいですか。

3番、遠藤一善君。

○3番（遠藤一善君） ちょっと補償の関係でお聞きしたいのですけれども、第4次追補以降就労不能とか、あと仏壇とかいろいろその後の追加賠償が始まっているようなのですが、請求書を下さいと言わないと請求書が来ないみたいで、請求書は来るものだと思っている町民が大分いるのですが、請求書を下さいと言わせるその状態をなぜそういう状態にしているのか、ちょっと答えていただけませんか。

○委員長（渡辺英博君） お願いします。

○福島復興本社福島本部郡山補償相談センター部長（西村幸治君） 基本的には、お電話をいただいたときにほかの請求書のまだご請求いただいていないご案内とか、そういったご案内とかと書き方のご案内とか、そういうのは一緒にできるということで、当社としてはお電話をいただいたほうがよりご請求者様のためになるということで、ちょっとそういったことでお取り扱いさせていただいているということです。

○委員長（渡辺英博君） 3番、遠藤一善君。

○3番（遠藤一善君） 申しわけないですが、加害者側が被害者に対して電話よこせというのは、一体どういう考えなのかというのが一番です。

それと、電話をよこした人とは言いましたが、では電話をしない人はほったらかしにしておくということなののでしょうか。結果としてそういうことですね。電話をよこさなかった人は、あなたは知りません。ほっときます。東電さんの送ったものを送った先の人が全員中身を見ているかどうか、ちゃんと電話をして確認をするという作業はしているのですか。していないですね。していなかったらば、その自分が送ったものを全部みんな町民がお年寄りから全員、そういう人たちも全部見ているというふうな勝手な思い込みだと思うのですけれども、見ていない人に対してどういうフォローを今考えているのか、はっきりとした回答をお願いします。

○委員長（渡辺英博君） 西村部長。

○福島復興本社福島本部郡山補償相談センター部長（西村幸治君） 請求書を送り返していただいている方については、こちらからお電話をさせていただいたり、あと例えば福島県内のラジオとか、あとそういったPRをして、極力皆様にご請求いただけるような努力をさせていただいておりますし、これからも引き続きさせていただきたいというふうに思っております。

○委員長（渡辺英博君） 3番、遠藤一善君。

○3番（遠藤一善君） 僕が言っているのは、請求書を送ってくれと言った人ではなくて、ずっとそうだ。ずっと請求書はそちらから送ってきていたわけです。それをなぜ今急に請求書を、請求して下さいと言わないと請求書をよこさないのですかということです。

あなた方は、少なくとも請求を、今やっているのはゼロの人を、まだ請求されていない方の話ではなくて、既に請求されている人で追加が出ている人に対して、あなた方は手紙一本よこして、はい、ここに該当する人は電話、請求書を下さいと言ってくださいと言っているわけです。何で加害者側が被害者側に電話をよこせと言わないといけないのですか。言葉は悪いですけども、そういうことです。我々に電話くれればお金払いますよ。追加払いますよと言っているのです、しかもそれを見たか見ないかの確認もせずに。だって、全員の電話番号と全員の住所きちんと把握しているでしょう。把握しているのだったら、その人にきちんと電話をしてできるはずですよ。それをしないでなぜ、通常役所の申請式のものというのは、申請をしなかった人が悪いのです、それは国の決まりみたいなものですから。だけれども、今回の請求するものは、あなた方が悪いのです。だから、一人一人丁寧にそれをこういうのがふえましたよというのを言ってやらなければいけない状態にあるのに、なぜあなた方は上から役所みたいなことをしているのですかということを知っているのです。

それで、今ラジオ。ラジオ聞かない人はどうするのですか。そうしたら、あなた方は持っている情報の人にきちんと一人一人電話をして、こういうものが追加になりましたから請求書をお送りしますというのが本当ではないですか。なぜ請求書送らなくなったのですか。先ほどその返事がなかったのですけれども、請求書をなぜ送らなくなったのかということと、今あなた方が言ったのは、あなた方の論議で、こちら側からしてみれば、あなた方の言ったものをテレビも何も見ない人もいます。見ない人に対して、どういうフォローをするつもりなのですかということで、きちんとお答えください。

○委員長（渡辺英博君） 西村部長。最後ですので、きちんと答弁漏れのないようにお答えください。

○福島復興本社福島本部郡山補償相談センター部長（西村幸治君） これまでこちらから請求書を送ったのを変えたという、そういった認識はなかったのですけれども、これまでも基本的には電話を、そこがいかどうかちょっと別にして、いろんなほかの状態とか、そういったのをやるために1回電話をいただいて、請求書をそのときご請求いただいておりますということなんです。あと……

○副委員長（安藤正純君） 西村部長、3番委員の言っているのは、加害者側が被害者に対して、あなたはこういうことに関して請求権ありますよと、そういうお知らせをしていますかということなの

です。結局今東電やっているのは、請求主義だから請求のないものは払わないよと、そういうことではなくて、結局そのテレビも見ない、ラジオも聞かない、余りそういうことに興味の少ない人が請求権の漏れる、これを危惧していて、やはり東京電力のほうからこういうふうな支払いが開始したので、あなたはこういうものの請求の権利があるよとお知らせをどんどんしていますかということなのです。そのことに関してちょっと答えて。

○福島復興本社福島本部郡山補償相談センター部長（西村幸治君） 基本的には、プレス発表をしたり、あとDM、基本的には請求書ちょっと初め送らないのですけれども、ダイレクトメールとか送ってお知らせはしております、その努力がなかなか足りないというのは確におっしゃるとおりだと思いますので、今後そういったのを見ない方とか、そういった方に対しては当然最後の1人までこちらで賠償するということでお約束しておりますので、当然請求来なかったからといってほったらかすということは全く考えておりませんので、引き続き努力していきたいというふうに思っております。

○委員長（渡辺英博君） 2番、早川恒久君。

○2番（早川恒久君） 1点質問させていただきます。

その前に、前回の私の要望に対しまして、復興本社の活動の取り組みにつきましてまとめていただいております。

それで、この復興本社の今何人いらっしゃるかちょっと今わからないのですけれども、その中で双葉郡の住民がどのぐらいいるのか。それ以外の東電の社員とか子会社のその県外の方がどのぐらいいるのかをちょっと教えていただきたいのですけれども。

○委員長（渡辺英博君） どなたがお答えになりますか。

〔「ちょっと確認よろしいですか。復興本社で働いている人間ということですね」と言う人あり〕

○2番（早川恒久君） はい。

○委員長（渡辺英博君） 林執行役員。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） 今の早川委員のご質問なのですが、詳細の人数はちょっと把握できていないです。

4,000人いる中でどれぐらいかという、多分もともといる福島第一、第二、それと広野、あと猪苗代電力所ですか、ここの社員はほぼ70とか70を超えるぐらいなのですから、いわゆる賠償復興推進、それと除染に担務している人間が2,000人弱いるかと思うのですけれども……もう少し少ないか、千何百。大半は、やはり東京から来ているという方が、東京というか首都圏から来ているという人間が多いのです。詳細については、できるだけまた数字をお示しさせていただきたいと思います。

○委員長（渡辺英博君） 2番、早川恒久君。

○2番（早川恒久君） ほとんどが地元の双葉郡の住民及び県内の住民ということだと思うのですが前にもちょっと質問したのですけれども、この事故というのは、やはり東京電力全社の全体の責任と

いうことでやるもので、東京電力の管内というのは幅広く、本社も含めて発電所、あとは支社とかあると思うのですが、やはり極端に言えば全員が1人1回は必ず復興本社で働くというような、そういうことが私は必要だと思うのですけれども、そういう流れには多分なっていないように私は感じるのですけれども、その辺はどうなのでしょう。

○委員長（渡辺英博君） 林執行役員。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） ありがとうございます。

復興本社の4,000人の中に、人事ローテーションで福島に来るというのは、今も事故前も福島第一や第二、広野へ勤務するということはありますので、それは通常の人事異動であるかと思います。今先ほどちょっと私も挨拶の中で述べたように、ベテラン社員500人いるのですけれども、2年かけて250名ずつ福島に来るとか、あと先ほど武井のほうから説明させてもらった、これ記録として我々残しているのですけれども、福島の復興が私たちの原点という、これ写真集にして我々も記録として今残させていただいているのですけれども、これは今早川委員が言われたように、私ども廣瀬社長の号令で福島の現実を見て、それをきちんと感じて自分の仕事に生かせるようにという指示のもと、今年に2回から3回約1週間弱で福島にこういうようないろんな復興推進活動に携わるというのはルール化できております。これは、今後も続けさせていただきたいと思っております。

○委員長（渡辺英博君） 2番、早川恒久君。

○2番（早川恒久君） この復興に向けた取り組みということでいろいろやられているということは評価はしているのですが、やはりその双葉郡の住民が中心になってやられていることは間違いないと思うのです。

少しなりとも、その他県からの東電の社員の方も来ているのはわかるのですが、まだまだ私は足りないのかなとは感じております。ですから、先ほどもお話ししたように、1人1回は必ず、例えばお偉方でもいいと思うのです。そういう方でも必ず1回来るような、そういう方針でやられれば、我々の気持ちとしてもああ、頑張っているのだなというふうに思うと思うのです。ですから、その辺をもうちょっと検討していただけるようお願いしたいと思うのですけれども。

○委員長（渡辺英博君） 林執行役員。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） ありがとうございます。

今早川委員言われたように、我々の業務の目標の中にも、100%の人間が首都圏のほうからこの復興活動に携わるようにということで動いています。ただ、若干正確に言いますと、どうしても来れないような人間も中にいます。体が不自由だとか、1人で親御さんを介護されているという方もいるので、そういう方はちょっと除きまして、あとはできるだけ先ほど言いましたように、年に2回から3回こちらに、福島に足を運んできちんと地元を見て、先ほどちょっと話の中に出てまいりました家屋清掃なんかは町民の方、村民の方と触れ合う機会もあって、いろいろ話もできる場面もあります。そういうものに接しながら、我々今後も活動していきたいと思っておりますので、またご意見がありましたら

よろしくお願ひしたいと思ひます。ありがとうございます。

○委員長（渡辺英博君） 西村部長。

○福島復興本社福島本部郡山補償相談センター部長（西村幸治君） 済みません、午前中の答弁を一部訂正させていただきたいのです。追加説明をさせていただきたいのですけれども、よろしいでしょうか。

○委員長（渡辺英博君） はい。

○福島復興本社福島本部郡山補償相談センター部長（西村幸治君） 未請求の方への対応、町当局と検討中というお答えをさせていただいたのですけれども、既に私どものほうから私どもの補償のリストにつきましては町当局にご提出を、個人情報の同意を得たものをご提出させていただきまして、現在町当局様のほうで逆に突き合わせをして、未請求の方を東京電力に知らせていいかという個人情報の同意の作業を既に入っておりますので、検討中と申し上げましたけれども、もう一部実施中でございますので、訂正させていただきます。

〔「はい、わかりました」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） そのほかございませんか。

〔「なし」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） なければ、次に付議事件2の中で東京電力に対してその他何か皆さんの中でご意見があればお願いします。ございませんか。

副委員長。

○副委員長（安藤正純君） 林執行役員にお尋ねします。よろしいですか。

今避難している私たちの一番の関心事は、浪江のADRで仲介が出た精神的な慰謝料5万円アップ、これは東京電力は回答を1カ月繰り延べたと。そういったものがこの富岡にも該当させてほしい、それは多分今富岡町民にとって一番の関心事だと思います。今林さんに例えば私が聞いても、答えられる内容でないということは私もわかりますけれども、原賠審の能見会長のあの答申の中の言っている言葉、あれを読むと最低の基準のお示しなのです。東京電力にはさらなる努力を求める、そういう言葉も入っています。そういうふうな観点から、林さんはどんなふうな考え持っているか。やはり私らは、賠償並行展開はしてもらいたいのです。その辺の考えをちょっと聞かせてください。

○委員長（渡辺英博君） 林執行役員。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） まず、紛争解決センターそのものの位置づけなのですから、本来ADRは被害を受けた方々の個別の案件、特異なご事情をお伺いしながら、それを踏まえて仲介委員が間に入って和解の仲介のあっせんをするというものと私は考えております。これは、一般的に言われていることかも知れません。

今回の内容につきましては、今副委員長言われたように、私がお場でできる、できないというのはちょっと言える状況でないというのは確かなことなので、我々も和解案の尊重ということはどう



ております。ただ、今回の内容は、一般論としてですけれども、非常に内容の複雑性や中間指針の考えと、これまでの各和解案の内容をきちんとやっぱり精査しないといけないという必要があって、それに時間が非常に要しているというような今状況であるので、その和解の吟味とか検証のためにもう少しお時間をいただきたいという状況でございます。

本件については、今副委員長のご質問にあったADRについて我々もしっかり検討しながら、非常に多くの方々に一律に損害賠償を増額するという内容であることから、影響も非常に大きいということで、やはりきちんと検討しながらご回答するというので、1カ月ぐらいお時間いただきたいという話をしているところでございます。

○委員長（渡辺英博君） 安藤副委員長。

○副委員長（安藤正純君） 林さん、ADRは個別案件と今おっしゃいましたけれども、例えば安藤個人は月50万円欲しいとか70万円欲しいと、これは個別案件なのです。

ただ、富岡町民全体、10万円を15万円とか、それは個別案件では私はないと思うのです。結局総論的な話で、各論ではないと思うのです。それで、原賠審の月10万円というのは、自賠責の1日4,100円、ここから持ってきているのです。すると、1カ月12万3,000円なのです。それを10万円ずつ払っている。例えば要介護状態とか、身体障がい者の方とか、ADRでは13万円とか14万円とか決まっている人はいるのです。でも、東京電力は、並行展開する場合には1級の人が1万5,000円アップくらいにしかやっていないのです。精神的な慰謝料も低く抑えて、結局能見会長の原賠審の精神は、先ほども言いましたけれども、最低基準を示しているから、プラス・アルファを求めているのです、東京電力に。東京電力は、個別案件だからと抑えてしまっているのです。その辺のところをよく考えてください。決してこれは、富岡町民一人一人の個別案件ではない。富岡町民全体の問題だということは、これは声を大きくして言わせてください。その辺の解釈をもう一回お願いします。

○委員長（渡辺英博君） 林執行役員。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） 本当にこれは繰り返しにやっぱりなってしまうと思うのです。

多分見合わないのだと思うのですけれども、ADRで扱われる案件というのは、その被害を受けた方々のやはり個別特有のものを、ご事情をお伺いしていくと。それを踏まえて、やっぱり仲介の方がいるわけですから、その仲介委員が仲介案をあっせんするということになっておりますので、我々としてはそういうスタンスで対応しているということだと思うのです。

本件につきましては、繰り返しになりますけれども、今我々としてはしっかり調べるところを調べてご回答する時期が来ると。それで、できれば1カ月期間いただいておりますけれども、できるだけ早くというような覚悟で臨んでおります。

以上であります。

○委員長（渡辺英博君） 安藤副委員長。

○副委員長（安藤正純君） 結構写真撮っていっぱい被災した町のために掃除をしているとか、こういう目で見てわかる、こういうこともやってはくれているのだけれども、肝心なことは私はやってもらっているとは思っていません。先ほどのお墓の問題もそう。こういった賠償もそう。やはりその目立つところだけやっているのではなくて、肝心のところもきっちりやってください。

回答要りません。

○委員長（渡辺英博君） 林執行役員。

○福島復興本社福島本部執行役員復興推進室室長（林 孝之君） 我々とすれば、先ほど武井が述べましたように、賠償、それと復興推進、除染は環境省さんのもとでやらせていただいておりますけれども、ここをしっかりとやる。

言うまでもなく、1Fの廃炉等々ここはしっかりとやるのが我々の務めだと思っておりますので、今副委員長言われたように、どこを目立ってやるとか、ここをやるとかということではなく、我々復興推進活動は、賠償で補えないようなところも含めてしっかりとやらせていただいているという気持ちでやっておりますので、引き続きその3点、そして1Fの廃炉はしっかりとやらせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○委員長（渡辺英博君） そのほかございませんか。

〔「なし」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） ないようですので、以上で付議事件2を終了いたします。

林執行役員を初め説明いただきました東京電力の皆さんにはここで退席をいただきます。大変お疲れさまでした。

暫時休議いたします。

休 議 （午後 1時35分）

---

再 開 （午後 1時38分）

○委員長（渡辺英博君） それでは、再開いたします。

付議事件3、その他を議題といたします。

執行部からございませんか。

〔「ありません」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） 委員の皆さんからございませんか。

〔「なし」と言う人あり〕

○委員長（渡辺英博君） ないようですので、付議事件3、その他を終了いたします。

以上で原子力発電所等に関する特別委員会を終了いたします。

大変お疲れさまでした。

閉 会 （午後 1時38分）